

昭和廿六年三月廿五・廿六日
黒川古文化研究所第一回展観

中國及び日本の古鏡展観目録

黒川古文化研究所

例言

本黒川古文化研究所收藏の古鏡類は、先代黒川幸七氏が生前意を用ゐて蒐集したものであつて、中國鏡と和鏡との兩者に互つて、其の總數は四百面に近い。その蒐集は古く明治の末年に遡るのであつても、中國鏡にはしまつて、光流素月四獸鏡（陳列品一三）の如きはその早い例をなすものである。併し其後は和鏡に見られる日本的な面に寧ろ興味を持つて、その方の蒐集が主となつて、晩年に及び引いて和鏡蒐儲の富は中國鏡を超へるものがあるのであり、殊に平安後期の遺品に至つては、有名な羽前羽黒神社の神池から出た百餘面の一括遺物をはじめとして見るべきものが多い。併し中國出土の遺品も、昭和四五年の頃から前者と並んで蒐集に意を用ゐた結果、京都守屋孝藏、神戸嘉納治兵衛兩氏の後を承けて、新たに彼の國から舶載された戰國時代なり、唐代盛時の遺品を集め得て、また我が國での一つの蒐藏品として擧げらるべきものがある。そしてそれ等に更に本邦古墳出土の古鏡を以てした點で、東亞を通じての古代金屬鏡の主要な分野に互つたことが注意されるのである。

さて是等の古鏡のうち、中國鏡の或者は既に世に知られて、研究上にも利用されてゐるが、和鏡の如きは全く秘藏されて紹介を経てゐない。そこで先代の歿後、それ等の整理を行ふと共に右の好資料を公にする爲に、中での優れたもの約百五十面を撰んで、その圖録の印刊が企てられたのであつたが、時局にさまたげられて中絶してゐた。それが本研究所の設立と共に、こゝに研究所の出版物の第一冊としていよいよ出版されることになつたので、開所式につゞく第一回の展観として、先づその展観を行ふ次第である。尤も設備の關係などから陳列したのはその中での五十面に限らなければならなかつたので、羽前羽黒神社の發見品はすべて他日の機會に譲ることにした。併しこの陳列品を通じて東亞に特に發達した金屬鏡の一斑とその優れた技巧が看取されるであらう。

終りにこの古鏡類に就いての整理は早くから現本研究所研究員梅原末治が従事して來たものであり、引いて展観の事もすべて擔當した。本目録は研究員武藤誠の助力に依つて作製したものとすることを記して置く。

昭和二十六年三月

黒川古文化研究所

中國鏡

一 賦彩三虺透文鏡

傳河南省洛陽府外全村古墓出土

〔戰國時代〕

一面 徑三寸四分
緣厚一分

鏡式は戰國時代の遺品に往々見受ける、鏡體が二つの部分から成るもので、青銅で作られた背文部に良質の白銅の鏡面を嵌めこんだ式である。本鏡ではその背文は鈕を繞つて、表出に肉を持たせた三個の虺形をば巧みに絡ませアラベスク風の透文として、その上に朱・綠・白等の色で細部を描き出し、更に同じ色彩で緣部に文様を描いてゐる。なほ右の透文の下には、もと通じて張つたと思はれる布の一部が残つてゐて、主文である透虺文に對して、もとそれが地文をなしてゐたことの推知されるのは一般戰國式鏡に認められる通性と思ひ併せて興味が惹かれる。

本鏡と全く形制を一にして、同範の所鑄と見られる遺品が本所收藏品中になほ一面ある。

昭和十二年十一月十一日 重要美術品認定

二 羽狀地文鏡

〔戰國時代〕

一面 徑三寸二分
緣厚一分七厘

鈕を中にして鏡背の全面に型に依る單位文を布置したものが、戰國式鏡の圖文構成上の最も古い段階に屬することは、現在多くの學者の一致する所であるが、本鏡はその好例をなすもので、それが鮮鋭な鑄上りを示し、その上地文の布置も均齊であり、縁も平で如何にも古い趣を具へてゐる。なほ銅の地肌は褐銅に近く、その上に硬い綠銹を着けてゐる。この點は淮河流域出土の戰國式鏡の外観と違つてゐるので他の地方からの出土品であらう。

三 羽狀獸文地四山鏡

〔戰國時代〕

一面 徑五寸二分餘
縁厚一分六厘

鏡背全面に型に依る圖文を布置した所謂地文の上に、段々と他の圖形を重ねてこの後者が主文たる位置をとつて行く戰國式鏡前半の諸類のうちにあつて、最も整ふて且つ遺例の多いものが所謂四山鏡である。この種鏡は孰れも變様羽狀獸文地に所謂山形文を重ね置いて、その幾何學的な整然たる構圖に特色がある。本鏡は紐狀の鈕を繞つて方格があり、その各邊に對して外縁から所謂山字文を置く外、別に方格の四隅に寶珠狀の葉文を附し、それから挺出した一種の棍棒狀文を以て間隙を埋めると云ふ構圖のものである。それと共に本鏡で珍らしいのは面に少許の肉反りの認められることである。通體鉛銅色を呈して水中古に近い色澤を示す點から、所傳はないが淮河流域から發見されたものであらうか。

四 羽狀獸文地四獸鏡

〔戰國時代〕

一面 徑七寸弱
縁厚二分

出土の際破砕してゐたものを接合復原したものがら、大きくて薄い鏡體が鮮鋭な鑄上りを示してゐるのは漆黒の高い光澤のものたる點と相まつて如何にも美しい。鏡背文の大體は型による羽狀獸文地の布置の上に四獸を重ねた式であるが、獸形はすべて線表出で、更にそれらの間に鈕を繞つて八弧四葉の一種の圖形を配すると云ふ複雑なもの、そして中央の紐形鈕上にも細かな渦文を施してゐる。この種の鏡中最も手の込んだ作例とせられる。

五 細文地四葉禽獸文鏡

〔戰國時代〕

一面 徑六寸一分五厘
縁厚五分厘

本鏡は細かな渦文地の上に影繪的な禽獸形の主文を重ねた鏡式の標本的なものである。極めて薄い鏡體は殆んど平面に近く、少々大きな鈕を繞る七面取りの圓座の四方から葉形を出し、これと外縁を飾る十二弧文との間の地文の上に、著しく渦様文化した禽獸形各一双を配してあつて、平で素文なこれ等の圖形と細密な地文とが好對照をなしてゐる。鏡は光澤のある鉛白銅色をして、背文の鑄上りもよい。たゞその半ばが褐銅を以て覆はれてゐるのは、墳中で二つに破砕して一方がこの様な變化を受ける部位に存してゐたのによるであらう。

六 重圈蟠螭鏡

〔前漢時代上半〕

一面 徑五寸六分
縁厚二分八厘

鉛黒色の銅色をした鑄上りのよい鏡で、鋭い曲線を示す紐狀鈕の座には盤踞した螭形を表はし、これにづく銘帯には二條の突帯を添へ、廣い内區を経て七面取の縁となつて是等には概ね細かな渦文地が印せられてゐる。右の地文上に於ける内區の主文は、内帯から火焰狀に近い圖形を四出せしめて、その間に蟠

螭を配して居り、これが著しく渦文化し乍ら局部のコンマ状突起に力を持たせたと古調を備へて居る。銘帯は魚形を首にして

大樂高貴。千秋萬歲。宜酒食。
なる吉祥語を以てしたものである。

この種鏡は細文地に主文を重ねた點が、その圖文と共に戰國式鏡に通じた性質を備へてゐるが、同式鏡中で最も後出の段階に屬する。さればその實年代は前漢代に入るであらう。

七 四乳虺龍文鏡

〔前漢時代後半〕

一面

徑四寸五分
緣厚一分

先端の鋭く尖つた四葉座鈕を繞つて切目を加へた突帯があり、これと縁を形成する十六弧文との間に、主文たる虺龍を配したものである。その虺龍文は圓座乳四個で等分された間に各々一つ宛を容れて局部の突起状をした雄勁にして且奇古なものたる點で、よく先秦と漢との中間的な特徴を備へてゐる。鑄上りよく、いま一部に褐鐵色に近い銹を點じてゐる。鈕と四乳が特に綠色を帯びてゐるのは、もと同部に彩色した爲であるかも知れない。

八 九曜文鈕日光獸帶鏡

〔前漢時代末葉〕

一面

徑六寸弱
緣厚二分

通體漆黒の美麗な色澤をしてゐる。背文は特色ある所謂九曜文座鈕と素な突起平縁との間に、兩側に斜行櫛齒文を伴ふた突帯を置いて内外の二區に分ち、内の鈕座區には四個の奇古な禽形と

見日之光。長毋相忘。

の銘文を配し、その外方が主文たる獸帶をなしてゐる。この獸帶は、多くのものと違つて、乳による區分などなく、自由にいろいろな禽獸を點綴して、うちに象をはじめ猪・猿など、云ふ珍らしい圖象を見出すことは、その或者の表出が活動的で繪卷にも比すべきものある點と併せて本鏡を特色つけてゐる。これ等の圖形は通じて鮮やかな鑄上りを示すが、たゞ地肌の面には可なり的小龜裂を見受ける。かゝる現象は范が石などの硬質な場合に生ずると云はれる。然らば本鏡の范は漢代に往々見受ける滑石でも作られたものであつたらうか。

九 夔 鳳 鏡

〔後漢時代〕

一面

徑四寸
緣厚一分

漢代に行はれた種々の鏡式の中に、その表出が平面的で構圖に古調をとどめたものが二つある。その一は獸首鏡、他は夔鳳鏡である。後者の夔鳳鏡は鈕座を繞つて糸卷形に近い圖形を置き、それに依つて四分した各に相向ふ夔鳳を配する式であるが、これを右の糸卷形の一部を中にして見ると、一面獸面を形成する點で夔鳳の奇古な形態と共に古い面影を強く示すものである。

本鏡は同式鏡中の完好なもので、表背共に光澤の高い漆黒色を呈し、整美な鈕を繞る背文は鮮かな鑄上りを示してゐる。銘は鈕座と相向ふ夔鳳の頸部に

長宜高官。士至三公。

なる文字が共に正しい漢隸で表はされて居て、圖文と併せ見て鑄造の時代の後漢の初期にあるべきを思はしめる。

一〇 車馬神人畫像鏡

浙江省紹興古墓發見

〔漢末三國時代〕

一面 徑七寸一分五厘
緣厚 三分二厘

背面を飾るに後漢代に盛行した畫象石に見ると相似た表現の圖文を以てしたものである。この種の鏡は從來我が上代古墳の出土品に佳良な遺品を見るのみであつたが、昭和十年頃から浙江省紹興の附近にある多數の古墓の採掘に伴ふて夥しい遺品が発見されて、中國出土例を豊富にすることゝなつた。本鏡はそのうちの一例で神人と車馬とを主文として居るが、三角縁に添ふた細い帯に於ける獸文と、右の内區の圖像の大きい點に特色がある。即ち前者では龍・虎等の尾部が延びて一種の連續狀華文を形成して居り、後者の鮮かなその表出の圖形では「東王父」「西王母」「富位習子」等の傍書のある神仙像の他に、その一區に配した駿馬に、背上に逆立して輕技を演ずる一仙人や、前に踞した人物等が表はされ、而も馬には鞍以下の装具を着けてゐて、よくその制を徴し得るのが珍しく、四頭立の馬車にあつては車後に乗車者の顔を出してゐる所などが寫し出されて繪畫的な趣が多い點が注意を惹くのである。

昭和十四年七月十三日重要美術品認定

一一 建安十年五月重列神獸鏡

〔後漢獻帝時代〕 西紀二百五年

一面 徑 四寸三分
緣厚 一分三厘

大きな鈕孔の延長線の上下に神人と「君宜官」なる刻銘を容れた短冊形の區劃を置き、これを中心として左右に、一方から見る様に階段狀に神人と龍虎朱雀などを半肉彫に表はしたもので、一部に人面鳥身の像なども見受ける。而してそれから突帯を経て主銘のある外區につゞく所に構圖上の特色がある。この種鏡式は現存品中に紀年を表はしたものが割合に多くて、漢末から三國時代に一時行はれた鏡式たることが知られる。本鏡は中での鑄上りのよい一例であつて、主銘文は

吾作明竟。幽涑官商。周羅容象。五帝三皇。白牙單琴。黃帝除兇。白牙朱鳥。玄武白虎。青。建安十年五月六日作。宜子孫。大吉羊。

と讀まれて、比較的早い時期の作品たることを示すものである。

昭和十二年六月廿九日重要美術品認定

一二 魏甘露五年獸首鏡

〔魏高貴卿公髦時代〕 西紀二百六十年

一面 徑 五寸五分
緣厚 一分七厘

漢代に行はれた平面的な背文鏡の一なる獸首鏡の系統を承けた遺品であるが、而もその銘文中に甘露五年の所鑄であることを明示する點に、資料としての重要性がある。背文は完好な鈕を繞つて一種の渦文座と珠文圈とがあり、その外に糸卷狀圖形を置いて内外に主文たる獸首を表はし、外區は渦文帶と菱形文帶とから成つて居る。是等の點は後漢に多い鏡と同式であるが、すべてに便化の迹が多く、それが内外兩區の間に左行で

甘露五年二月四日。右尙方師作竟清且明。君宜高官。位至三公。保宜子孫。

とある銘文に相應する。この銘は位至三公の四字を除いて他は左字となつて居り、西紀二六〇年に魏の右尙方の官工で作られたことを明示してゐる。鏡は黒銅色をして、白銅質であることを思はしめるが、出土後年時を經過したと覺しく、いまでは土中古色の趣は認められなむ。

昭和十二年六月廿九日重要美術品認定

一三 光流素月四獸鏡

〔唐時代初期〕

一面

徑四寸五分
緣厚三分餘

この鏡の背部は完好な鈕を繞つて細密な珠文圈があり、内區には疾驅した四獸の獸形を牛肉刻の自由な手法で表はし、二つの鋸齒文帯を添へた突起部を経て外區の銘帯となり、同様な突帶縁に終る莊重な作りである。銘帯には

光流素月。質稟玄精。澄空鑿水。照廻凝清。終古永固。瑩此心靈。

と云ふ四字句の文學的な銘を容れて居り、圖文と併せて中國人の所謂「隨鏡」の範疇に屬することを示す。但し鑄造年代は固より短い同時代に限るべきではない。本鏡は漆黒色の極めて高い光澤を持つてゐて鑄上りもよく、大さは中等位のものながら、この時代の鑄鏡術の精を徵證する好例である。

一四 海獸葡萄文方鏡

〔唐時代初期〕

一面

一邊長三寸五分
緣厚三分弱

厚手の作りであつて、鏡體は白銀に近い色澤を示す。出土後傳世したと見えて鮮やかな土中古色に乏しいが、その爲にまた面に滑澤を加へて一種の趣が認められる。背文は突帶を以て内外の兩區に分つて、内區は怪獸鈕を中央に、旋轉した葡萄文を布置した上に四獸を容れ、外方は同様な蔓文の所々に禽形と蝶蜂の類を點出してゐる。かゝる圖文は葡萄鏡を特色づけるものなのである。

一五 永徽元年四神鏡

傳河南省洛陽附近出土

〔唐高宗代〕 西紀六百五十年

一面

徑六寸一分
緣厚二分五厘

鏡背を内外に分つのは二條の鋸齒文を印した突起帯であつて、外緣部また相似た突帶よりなり、兩者の間が銘帯をなしてゐる。注意すべきは圓座鈕の周圍に蓋を伴ふ蓮葉が作られ、方格これを繞り、更にその四隅に當る所に外帶からV字形を出す等構圖の複雑な點である。内區の主文は右の方格の各邊に對して薄肉の手法で、青龍・白虎・玄武・朱雀の四靈を一つ宛圖したもので、空際に華文を點じたもので、是等の圖形に於て彼の高勾麗壁畫の四神に似通つてゐることが認められる。外區の銘は

光流素月。質稟玄精。澄空鑿水。照廻凝清。終古永固。瑩此心靈。

とある。本鏡は中國人の所謂隋鏡の特徴をよく具備したものであるが、右の主銘の外に、別に緣邊の帶文の四方に「永徽元年」と云ふ鑄造の紀年を表はして居て、この種鏡式が唐代初期にも行はれたことを明示する點で學術上注意すべきである。

本鏡は河南省洛陽より出土した遺品と傳へるが、白光の銅色に鮮やかな銹を點する所、まさに近時の出土にかゝることを推さしめるのである。

昭和十二年十一月十一日重要美術品認定

一六 騎獅子人物文八稜鏡

河南省洛陽附近古墓出土

〔唐時代盛時〕

一面

徑九寸五分餘
緣厚三分

鏡背は廣い内郭と一段高い八稜形で縁取られた外郭とから成ること、及びその兩者に於ける圖文の布置は、唐鏡の通有性を備へてゐる。しかし本鏡の外郭文は縁帶と蓮葉とをそれぞれ口にした二種の飛禽を二つの違つた瑞花の間に交互に配すると云ふ入念な式であり、更に内部には中央の獸鈕の上下に豐麗な大形の瑞花を容れた外、鈕の左右に各々獅子に乗つた人物像を薄肉刻で表はしてゐるのが目立つて、これらの點に著しい特色を示す。即ち右の人物は共に縮毛の裸形に描き出されて一方は鼓を前にして兩手でそれを打つ所を示し、他は笛を吹いてゐて一見南方印度方面の人物を表はしたことが認められ、唐代に於ける南方との文化交渉を示す點で興味を惹く。徑一尺に近く、從來中國出土の古鏡としては稀な大形品であるばかりでなく、如上の珍らしい背文は精良な鑄上りを示して居り、質は佳良な白銅を以てしたもの、いままほ美しい色澤をとどめ、それが鮮やかな綠鏽と相映じてゐるところの美觀をも賞すべきである。

昭和十二年十一月十一日重要美術品認定

一七 靈獸駕鳶花枝八稜鏡

〔唐時代前半〕

一面

徑七寸八分
縁厚二分

厚い莊重な作りの八稜鏡であつて、面の一部は鏽化してゐるが、大體鉛黒の銅色を呈し、質の佳良なるを思はしめる。出土後傳世したと見えて鮮やかな土中古色に缺けてはゐるが背文は良好な鑄上りを示す。背文は内外の兩區を分つた式で、主要な内區では素圓の鈕を中に寶馬麒麟と鳶とを交互に布置して居り、是等はいづれも肉刻的に表出せられ、それぞれに活動的な姿態を示してゐる。一段高い外郭文は蝶蜂を點じた花枝と交互に華やかな花雲文とからなる。當代の佳鏡の一と云ふべきであらう。

一八 伯牙彈琴八花鏡

〔唐時代盛時〕

一面

徑七寸四分
縁厚一分五厘

背文は淺い八花鏡の縁取りに接して銘帶を置き、そのうちを大きく一區として、東海の竹林間に伯牙が彈琴する故事を寫したものを主とする、神仙的な圖柄の式であつて、鮮やかな鑄上りを示し、それが高い白光の色澤と相俟つて美觀をなしてゐる。主文の構圖は鏡の下邊に靈池を描き、それから出た一莖上に大きな蓮葉を着け、中央の龜鈕をこの上に位置せしめてゐる。次に鈕の左方に琴を取つて獨りで水仙の操を歌ふ伯牙を、また之に對して右方に岩上に立つ鸞形を表はし、上邊には飛雲たなびく上に仙岳があつて別に樹木を添へてゐる。外區の銘は隸體で

鳳凰雙鏡南金裝。陰陽各爲配。日月恒相會。白玉芙蓉匣。翠羽瓊瑤帶。同心人心相親。點心照膽保千春。

と讀まれる。

昭和十二年六月廿九日重要美術品認定

一九 寶相華文八稜鏡

〔唐時代前半〕

一面

徑七寸二分
縁厚三分五厘

莊重な作りの白銅鏡であつて、一部分に綠鏽を點じた所があるが、なほよく本來の美しい白光の光澤をといめてゐることが時代相を示すものとして先づ擧げられる。太い突縁を以て作られた特徴ある八稜の外容は整ふた形をしてゐて、それに沿ふた外郭には花枝を配して交互に蝶を點する所、唐鏡に多い繪畫的な

ものながら、内郭の主文は六花形の寶相華文から成つて、その上に鏡背文の特色が見られる。即ち右の圖文は上面に雙獸を薄肉彫で表はした鈕を繞つて、六弧形の寶相華が中核をなして居り、その各弧に對して華麗な花形が一つ宛布置せられ、別に外縁からも各花間に小花形を配して間然する所のない構圖を仕上げたもの。これ等がまた優れた鑄上りを示してゐる。

昭和十二年十一月十一日重要美術品品認定

二〇〇 金銀平脫雙鳳文鏡

傳 河南省出土

〔唐時代盛時〕

一面 徑八寸
緣厚二分三厘

二つに破碎してゐるが形が大きく且つ平脫文の原形をよく遺存してゐる點で同種の寶飾背鏡中屈指のものである。素突縁の大きな臺鏡の面はいまも白銅の高い光澤をとどめてゐるが、縁邊には黒漆の鏽を點じてゐる。平滑なその背面には鈕を繞つて翼を張つた銀板の雙鳳を相向はせて大きく面一ぱいに布置し、體の一部に更に金の薄板を重ねて居り、また細部はケリ彫で細密に表はされて、よく時代の特色を具へたものである。

昭和十年五月十日重要美術品認定

日本古墳出土鏡

一一一 畫文帶神獸鏡

傳伊勢國多氣郡齋宮村大字岩内出土

〔六朝時代前半〕

一面 徑六寸七分
緣厚二分弱

此の鏡式は本邦上代古墳出土鏡に割合に例は多いが、本鏡は中で標本的なそして鑄上りの佳良なものである。明治三十八年伊勢國多氣郡齋宮村の神前塚から發見された三面の同式鏡中の一と傳へて、美しい土中古色を呈するところ如何にも所傳にふさはしい。背文は大きな鈕を繞つて有節重弧文圈があり、内區には一方より見るべく、上下左吉に四つの神仙像、これ等の間に乳を繞つた龍虎を置いて主な圖様をなして居り、それ等の各々に種々の神人禽獸の類が附隨して、すべて肉刻で表はすところ極めて複雑な様相を呈したものであり、これが外區に於ける禽獸文帶の飛動した構圖と共に著しい特色をなして居る。更に右の兩者の中間に突帯を挟んで半圓方形の帶を置いて、その方形格に四字宛の銘を容れた處、外縁を飾る菱形文帶と共に、また目立つものとせられる。銘は下邊の右下からはじまる四字句の整ふたものである。

吾作明竟。幽涑三商。配像萬疆。競從序道。敬奉賢良。周刻典祀。百身長樂。衆事主陽。福祿光明。

富貴安樂。子孫蕃昌。賢者高顯。士至高卿。與師命長。

昭和十二年六月二十九日重要美術品認定

一一二 方格規矩變形禽文鏡

傳山城國乙訓郡向日町出土

〔日本上古〕

一面 徑五寸三分弱
緣厚一分五厘

面に一分五厘内外の反りのある薄手の鏡であつて、その縁の断面は三角縁に近い。背文は大きな圓鈕座

を繞つて内に花文を容れた方格があり、三種の所謂規矩形の間に八乳と線文化した禽形を配して主文を作り、次に櫛齒文と菱形文の二帯を置いて素縁に終つてゐる。右の構圖は漢代に盛行したものであるが、表はされてゐる圖文が全く渦文化して特別な軟か味を帯びた點で著しい違ひを示して居り、自から我が上代の鏡作部の鑄造品であることを察せしめる。その鈕孔が割合に大きく而も一部に磨滅の痕のあるのは、使用による爲であらうか。いま青緑化して美しい色澤をなし背面一部には朱を點じて居て、所傳に相應しい外觀を呈してゐる。

一三三 三角縁三神三獸獸帶鏡

〔日本上古〕

一面

徑七寸三分
縁厚三分五厘

本鏡はわが上代の古鏡出土鏡に最も多い三角縁神獸鏡のうちで、その内區を繞つて特色あるゾーディアックの帯を表はしてゐる點で早く高橋健自博士の注意された鏡式である。鏡背文は鈕を繞つて有節重弧文の便化した帯があつて、それにつゞく内區には六個の乳の間に牛肉彫に近い手法で正面形の神人像と側面形の怪獸を交互に配し、また外圍に多くの帶圈を置く所、他の式と大差はないが、兩者の中間の本來銘帯に當る所に、本鏡では十個の素乳を布置しその間に右の獸帯が表はされて、うちに天蝠・雙魚の類を認め得るのである。もとバビロンに起り東西に流布したこの種獸帯を鏡背に印することは誠に興味深いことである。本鏡は通じて鮮銳な鑄上りを示し同式鏡中の佳品であるが、中國製作の明證のある三角縁神獸鏡に較べると、その間に本末の別が存し、銅質もまた異つてゐる。故に本鏡は彼に基く本邦鏡作部の作とすべきであらう。

一三四 三角縁三神三獸獸帶鏡

〔日本上古〕

一面

徑七寸三分
縁厚三分弱

「一三三」の鏡と全然同一の鏡であつて、面に印した龜裂の末に至るまで一致するから同じ範で作られた遺品たる事が推される。加ふるに銹色も全く同様であるから同鑄後同一人の有に歸し、後に同じ墓の副葬品になつたものであらう。この鏡共に出土地の所傳を缺くが、これと同範の所鑄と見られる遺品が更に他にも五面あり、一つの範からかなり多くの鏡が作られたことが知られる。そしてそれらの遺品が山城・河内・近江・尾張から出土して居る事實から、當時の交通や經濟などの事情をも察せしめる面があつて興味を深めるのである。

一三五 變形渦様文六鈴鏡

〔日本上古〕

一面

徑三寸二分
縁厚一分

周縁に鈴を着けた鏡は我が上古にのみ見出される遺品であつて、その背文の示すところと併せて、わが鏡作部の特殊な意匠に出てゐることは學者の等しく認める所である。附節の鈴の數は五個と六個のものが多く、本鏡は後者の例に他ならない。鏡體はいま銹化して白綠色を呈し、文様も磨滅して一見構圖を明かになし難い程である。この背文は大形の鈕から四方に山形の圖を突起して、その兩端が渦文狀をなし、條文を添へた點で一種の火焰狀に近いものが主文をなすよう、以下珠文帶、二條の鋸齒文帶を以て終つて居る。

和鏡

二六 瑞花雙鸞八稜鏡

花形鈕 内傾式厚縁

〔平安時代前期〕

一面

徑四寸五厘
高二分六厘

八稜の鏡體に唐式鏡の面影をとどめて居り、外區が一段高くそこに配した圖文も花枝と飛雲と云ふ點で同じ名殘が認められる。併し中央の鈕が八葉の花弁を伴ふたものであるのは珍らしく、更に主文をなす雙鸞と肉太に表はされた瑞花に時代の特色を示すものがある。白銅質のいまなほ高い光澤をとどめた佳品である。

二七 瑞花鴛鴦鏡

花形座鈕 内傾式厚縁

〔平安時代後期〕

一面

徑四寸九分五厘
高二分

鉛白の美しい銅色をした傳世品で、面の上下に双鉤體で、金剛界大日を表はしたバン、胎藏界大日のアの梵字が刻されてある。鏡體は面に少許の反りがある外、斷面の上で唐鏡に似てゐる。その主文は四方から見る様に鈕孔の兩側に鴛鴦を圖し、他の二方に左右均整の瑞花を、更に外郭にはそれぞれに相應する唐

二八 瑞花文五花鏡

花形鈕 内傾式中縁

〔平安時代後期〕

一面

徑三寸五分五厘
高三分餘

厚手の白銅鏡で、面は磨かれてゐて光澤がある。中央の花形座鈕には外形に應じた瓣形を添へて居り、内郭の主文には蔓狀の珠文帶の間に五花を配した圖文的なもので、外郭のそれも相應じた美しい花唐草から成る。是等がすべて整然たる圖様をしてゐて鑄上りもよろしい。

二九 瑞花鴛鴦八稜鏡

花形座鈕 内傾式高縁

〔平安時代後期〕

一面

徑四寸九分
高三分三厘

花瓣を添へた花形座鈕から一段高い外圈に至る間に二枝の結合から成る左右均整の瑞花と形の大きい禽形を配して主文とし、外郭文では八稜形のうちにそれぞれ唐草文を容れてゐる。この唐草の中央に蝶と鳥とを交互に配した點が注意を惹く。鏡體鉛銅色を呈した傳世品である。

三〇 唐草鴛鴦五花鏡

蓮華座鈕 内傾式高縁

〔平安時代後期〕

一面

徑三寸七分五厘
高三分二厘

鈕を繞る主文は外方から見る様に唐草と鴛鴦とを配布したものである。外圈の界線が殆んど目立たず、

鈕が蓮華座であり、唐草文がよく伸びた華麗なものである點に注意が惹かれる。面は磨研されてゐて、ま褐黄の銅色を呈してゐる。

三二 唐草鴛鴦鏡

花形座鈕 内傾式高縁

〔平安時代後期〕

一面 徑三寸七分弱 高二分七厘

通體鉛白の光澤のある佳良な銅質であるが、背面の一部に薄い緑銹を着けて、その上に鮮かな土中古の色澤をとめてゐる。紀伊國那智經塚の出土品と傳へて、他の確實な發見品と似た所があるので、その然るべきを思はしめるのである。背文は大きな鈕から縁に至る間に鋭い一圏を配し、その内郭の主文をなす華麗な唐草文と鴛鴦とが整美で、而も鮮鋭な鑄上りを示す。加へて面に不動明王の座像を刻してあつて、その形像に頗る見るべきものがあるのは特記に價する。

三三 草花雙鵲鏡

素鈕 蒲鉾式縁

〔平安時代後期〕

一面 徑三寸三分弱 高一分弱

帶圈の設けのない廣い鏡背の下邊に桔梗と見える草花を描いてそれに尾を長くひいて飛ぶ鵲を配すると云ふ優美な圖様である。面に若干の反りがあり、また縁を鑄成後削つて形を整へた痕をとめて居る。本鏡は羽前國東田川郡手向村出羽神社境内の出土と傳へるが、出土後年時を経たと覺しく、いま鮮かな土中古の色澤を呈してゐる。昔鏡

振形二重座鈕 外傾式細縁

〔平安時代後期〕

一面 高一分二厘

鈕の下方外圈に近く水草の生じた流水があり、その右の方から圈に沿ふて大きく二つの水草を表はし、内郭の一部に雙鵲を飛ばせてある。自由にして大まかな構圖賞すべきものがある。面に吉祥天の座像がケリ彫で細刻されてあつて、その形像はよく時代の同時性を示してゐる。鏡體は灰色に近い鉛色で一部に銹化したところがあつて、水中古たる趣を呈してゐる。

三四 秋草蝶鳥鏡

附 毘沙門天座像 一軀

花形座鈕 内傾式中縁

〔平安時代後期〕

一面 徑三寸八分 高二分五厘 高一寸九分

もと懸佛の本尊だつた毘沙門天の鍍金の小像を伴ふてゐて洛北鞍馬寺境内の經塚から出土したと傳へる。一部に歪みと龜裂とがある上に、硬い緑銹を着けて鮮かな土中古の色澤を呈し、所傳にふさはしいものがある。背文は下邊と右上側との二段に秋草を描き、左上の空間に雙雀と蝶とを點じた式で、その秋草は花をつけてにぎやかに全面を飾つてゐる。

三五 秋草飛雀鏡

花形座鈕 直角式細縁

〔平安時代後期〕

一面 徑三寸七分五厘 高二分二厘

背文は下邊と右上側との二段に秋草を描き左上の空間に飛雀を配した式である。その秋草は下邊では菊花に薄をあしらひ、鈕の右横に二枝の萩を大きく描いて清雅な圖様をなしてゐる。

三六 秋草飛雀鏡

花形座鈕 直角式中縁

〔鎌倉時代〕

一面 徑三寸五分五厘
高三分

同じく秋草を以て全面を飾つたものであるが、うちに薄あり、桔梗あり、女郎花があると云ふにぎやかな構圖である。平安時代後期の鏡に較べてやゝ繁にすぎ妙味に乏しい。

三七 柘榴飛雀鏡

花形座鈕 直角式厚縁

〔鎌倉時代〕

一面 徑三寸九分
高二分

完好な鈕を繞つて多くの實をつけた柘榴の老木を右方から上半に配し、左の下邊に雙雀を飛ばせた圖様の行方は鏡背文として鎌倉時代の標本的な構圖であるが、柘榴を用ひた點は珍しい、傳世品として、いま鉛灰の色澤ある銅色をしてゐる。

三八 秋草雙雀鏡

花形座鈕 直角式中縁

〔鎌倉時代〕

一面 徑三寸七分
高二分五厘

下邊に流水を伴ふた土坡を圖し、全面に桔梗・女郎花・薄其他の秋草を巧みに配布してゐる。その彫注の鮮かさは稀に見るところである。

三九 松竹雙雀鏡

花形座鈕 直角式中縁

〔鎌倉時代〕

一面 徑三寸七分五厘
高三分

花形座の完好な鈕の右方に大きな松樹を描き、左方に風になびいた竹樹があり、雙雀は竹にたわむれるやうな位置をとつてゐる。當代鏡文の通有性を具へた圖様である。よく鑄成されて、面に水銀を塗沫した痕をとどめてゐる。

四〇 竹垣櫻松藤雙雀鏡

花形座鈕 直角式中縁

〔鎌倉時代〕

一面 徑四寸
高三分二厘

厚手作りの褐銅色をした傳世古の鏡で、面に水銀を塗沫した痕が認められる。その背文は鈕の下邊に水波を伴ふた竹垣を現はし、それから全面に配した藤にからませて一方に満開の櫻、他方に松を描出した華やかなものである。その鑄成の精緻に賞すべきものがある。

四一 柴垣楊梅雙雀鏡

花形座鈕 外傾式中縁

〔鎌倉時代〕

一面 徑三寸八分五厘
三分五厘

鏡體の示すところ「四〇」の鏡と等しく、褐銅色をした傳世古の鏡であつて、面に水銀を塗沫した痕を留めて居る。背文は右下邊に柴垣があつて、その向ふから伸びた枝もたわゝに果實をつけた楊梅が全面を被ふといふ珍しい構圖である。

四一 菊花雙雀鏡

花形座鈕 直方形中縁

一面 徑三寸四分
高二分七厘

〔鎌倉時代〕

傳世古の鏡で、背文は完美な鈕の下邊からそれを通じて上に伸びた満開の菊花で全面を被ふといふ割合に類例多い式である。鑄上りよく圖文も極めて鮮鋭である。

四二 秋草菊花雙雀鏡

龜鈕 外傾式中縁

一面 徑三寸四分
高二分六厘

〔鎌倉時代〕

厚手作りの白銅品。傳世古。背文は大きな龜鈕に雙雀を配した一方を除いて、他の三方に満開の草花の束を圖し、それが一部外郭にまで及び、更に同部に桔梗・女郎花その他の草花を添へると云ふ盛澤山なものである。やゝ繁褥にすぎた觀があるが、秋草の細緻な表出を見るべきであらう。

四四 蓬萊方鏡

方鈕 蒲鉾式縁

一面 方三寸六分五厘
高一寸三分

方形の素鈕から縁に至る間に帶圈を設けない方鏡である。^{〔兼會持代〕}流水を配した岩山に松樹が繁り、それに大きい鶴や飛雲等を描き出した繪畫的な圖様に特色がある。傳世古。

四五 愛染明王柏楓樹雙雀鏡

龜鈕 内傾式中縁

一面 徑三寸八分
高三分

〔室町時代〕

鈕座は大きな龜形で、背文構圖は下邊の土坡から大きな柏樹が鈕を繞つて内外兩郭に伸び、一隅に楓を配したものである。龜鈕の下方に雙雀と共に愛染明王の像が表はされてあることを特に記すべきであらう。鑄上り鮮鋭、傳世古の遺品と見られる。

四六 巴紋散雙鶴鏡

龜鈕 内傾式中縁

一面 徑三寸九分五厘
高三分

〔室町時代〕

通體褐銅色を呈した傳世古の遺品である。鑄成がよくその面には水銀を塗沫してある。背文は上向した大きな龜鈕を繞つて全面に巴紋を散し、上邊の一部に小さく雙鶴を容れた全く文様のなものである。その巴紋が太い筥を深く返して肉を持たせた巧みな表出のものである。この種紋章鏡中の佳例と云ふべきであらう。

四七 群蝶雙鶴鏡

龜鈕 内傾式厚縁

〔室町時代〕

一面 徑七寸六分 高二分三厘

傳世古のいままほ光澤のある質のよい鏡で、面に水銀を塗沫してある。厚い縁の内に近接して鋭い尖線から成る單圈で、内外に分たれた鏡背全面にさまざまな蝶形を散し、中央上向の龜鈕に近く雙鶴を圖したものである。肉をもつたその圖文の鑄成は極めて鮮鋭で鏡體の大形なことと併せて、この種の鏡として見るべきものゝ一と云ふべきであらう。

四八 龍宮雙雀鏡

龜鈕 内傾式中縁

〔室町時代〕

一面 徑三寸六分 高三分

青銅質の厚手品である。背文は中央に大きな龜鈕があり、それに雙雀を配すること、形様と併せて室町時代鏡の様相をよく示してゐる。背文は下半に波に浮かぶ帆を張つた船を表はし、それに遠く宮殿並に松樹の線つた山景を描き、更の上邊瑞雲の間に弦月のかゝつたところを寫し、なほ寶珠を配しなどして龍宮を寫したことを思はしめるものがあるのは注意すべきである。傳世古の遺品で面に水銀塗沫の痕が認められる。

四九 牡丹孔雀鏡

形 形 龜鈕 内傾式厚縁

〔室町時代〕

一面 徑三寸六分 高二分五厘

厚手作りの鏡で、鏡背に多くの帶圈文を配した室町時代の一つの特色を具へてゐる佳品である。蓮瓣を添へた圓座鈕を繞つて牡丹花を内外に配置した上、内郭の下邊に相向ふた孔雀を表はしてゐる。形は整ふてゐるが、表出は生氣に缺けた感がある。傳世古。

五〇 龜鈕桐竹鏡

龜鈕 内傾式高縁

〔江戸時代初期〕

一面 徑七寸三分五厘 高三分五厘

白銅色を呈した大形の鏡である。大きい上向きの龜鈕から一圈を経て高い縁に至る鏡背の全面に、桐竹を配置するといふにぎやかな構圖であつて、而もそれ等が厚肉鮮鋭に鑄表はされてある。一隅に「天下一青盛重」と云ふ鑄銘があつて、青家所鑄の遺品たるを示してゐる。

後陽成天皇御物と傳へる天正十六年所鑄の牡丹鏡（廣瀨治兵衛氏舊藏）に近似して居て、また所謂御拜鏡の一と傳へるが、本鏡製作年代は江戸時代初期であらうか。

昭和廿六年三月廿日印刷
昭和廿六年三月廿四日發行

編 集 黑川古文化研究所
理事長 黑川幸七

印刷者 日本寫真印刷株式會社
京都市中京區壬生花井町三

發行所 黑川古文化研究所
兵庫縣芦屋市打出春日町三四